

# 電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

## 第三回

### 第三章 アメリカ生活

1

1

私は明治二十年（一八八七）二月二日にアメリカに旅立った。横浜からシテイ・オブ・リオデジャネイロ号に乗船した。

このまま安定した航海が続けば、二月末ごろにはサンフランシスコに着くだろう。

船のデッキで、少しぬるくなったビールを飲みながら海を眺めている。ずっとずっと先まで青い海が広がっている。波は高くない。

それにしても運命とは自分で図ろうとしても図れないものだ。誰がアメリカに向かう船のデッキでビールを飲んでいる私を想像しただろうか。

川越の田舎者が、何者かになろうと足掻<sup>あ</sup>いていたらこんなことに

なってしまった。

これでよかつたのだろうか。後悔しても、今更遅いのだが、とうとう福澤諭吉ふくざわゆきちという人の養子になってしまった……。

\*

福澤先生の次女・ふさとの結婚話が持ち上がった時、最初は、別家を立てて独立する考えだった。福澤と岩崎を合わせて岩澤とか何とか名字を作ればいいなど思っていた。

ところがいつの間にか、先生や奥様のきん様に説得され、福澤家の養子となってしまった。忸怩じくじたる思いはあるものの、留学させてやるとの誘惑に勝てなかった。

塾生たちが私のことを、福澤家の困い者になったなどと嫉妬しつと交じりの悪口を言っているのを耳にした。

そんなことは気にしない。私への悪口で溜飲りゅういんを下げるなら、良しとしなければならぬ。

一番気がかりなのは、母のサダのことだ。

婿養子話が持ち上がった際、父の紀一は体調が優れなかったこともあり、万事を母が取り仕切った。

父や親類縁者たちは、今を時めく福澤諭吉の養子となる話もろてに諸手

を挙げて賛成した。

しかし、母だけは浮かない顔をしていた。

兄の育太郎は、「長男としての俺の負担が少しでも減る。養子だろうが何だろうが構わない」と賛成した。私への仕送りを負担している育太郎は、母の気持ちもおもんばかって養子であろうと気にするなど言ったのだろう。

それでも母の表情は冴えない。私は、「留学するために養子に行くんです。今の時代は留学し、欧米の新知識を習得しなければ偉くありません。お父様、お母様を幸福にし、岩崎家を再興するためです」と母に言った。

そんなことを口にしながら、これは本当の気持ちなのかと、もう一人の私が疑っているという不思議な感覚を覚えた。

私は、母を悲しませてまで、どうして留学しなくてはならないのだろうか。

それに、留学先がどうしてアメリカでないといけないのか。

もしかしたら先生が幕末に咸臨丸で向かった先がアメリカだったからだろうか。それをきっかけに先生は世に出た。あわよくば私も同じ道を辿りたいと願ったのだろうか。

おそらくそうではあるまい。私の方こそ、他の塾生に嫉妬していたのだろうか。

私は軽薄才子けいはくさいしを自認しているが、とにかく塾の中で埋没まいぼつしないようにしてきた。それが何の後ろ盾だてもない自分が取りうる最善の道であると信じてきたからだ。その意味では無理もしている。

一方で、そんな無理をしなくても財産のある家に生まれ育った塾生は、易々やすやすと留学して行く。本人がそれをどれだけ強く望んでいるかわからないが、親の事業を受け継ぐには、留学し、箔はくをつけておくことが必要だからだ。そんな塾生たちが多くいるのを見て、私は密かに嫉妬あやむしていたに違いない。

先生は、『学問のすすめ』でこんなことを言っている。

「天は人の上に人を造らず人の下に人を造らずと言えり。(略) されども今、広くこの人間世界を見渡すに、賢き人あり、愚かなる人あり、貧しきもあり、富めるもあり、貴人もあり、下人もありて、その有様雲と泥との相違あるに似たるは何ぞや」

この言葉を見ると、先生もどうして人に格差が生まれるのかと考えていたのだと思う。

豊前大分中津藩ぶぜん なかつの下級武士の家に生まれた先生は、名門や上級武士の家に生まれたというだけで出世していく者たちを見て、嫉妬心あやむこころを抱いだいたり、忌々いまいましく思ったりしたに違いない。

この格差の壁を打ち破るのは、学問しかない。先生が辿り着いた結論だ。そしてその通り、学問で身を立ててこられた。その恩恵を私たちにも及ぼしてやろうと塾を開設されたのだ。

しかし学問を修めただけで世に出ることができるのか。それは甚だ疑問である。はなはやはり門閥閥閥もんぼつけいぼつ、富裕層出身者は、その対極にある者より、有利であることは確かである。

貧困で、下層階級の者は、いくら優秀で、学問を修めようとも世に出る機会が圧倒的に少ない。多くの者が埋もれたままで死んでいく。

明治維新直後は違っていたかもしれない。経済界を見渡しても安やす田善次郎だぜんじろう、渋沢栄一しぶさわえいいち、大倉喜八郎おおくらきはちろうなど、門閥閥閥などに依拠しない人物が大きな成功を収めている。岩崎弥太郎いわさきやたろうも同じようなものが、土佐藩の後ろ盾が少しは影響したかもしれない。

あの当時は、世の中全体が混乱し、価値観が大きく転換した時代だ。なにせ三百年近くも続いた徳川の世が終わるといふ大転換時代だ。そうした混乱期には、それに乗じるように新しい価値観を掲げた人物が登場してることが多い。

しかし混乱が収まり、世の中が落ち着くと、転換した価値観が既存の秩序となり、次代の新しい価値観を排除しはじめ。成功者は、既存勢力と化して新しく世に出ようとする者を阻む壁となるの

である。

現在はそうした時代であると言えるだろう。世に出たいと熱望する若者は、既存勢力の庇護を得ようと躍起になり、それが得られなければ早々に挫折を経験することになる。

福澤先生は、既存勢力が力を持つ時代に塾生が風穴を開けるように望まれている。独立自尊を強く主張されるのはそのためだ。

現在の政財界においては、薩長閥という一つの雄藩出身者が有利な位置にある。

幕臣出身の先生にしてみれば薩長が牛耳る社会は甚だ面白い。自分は、門閥閥もなく、派閥の支援もないという不利な状況から今日の名声を獲得したのだから、塾生にもできるはずだと思われているのだ。

先生が官僚にはなるなと口を酸っぱくしておっしゃるのは、官僚の世界が薩長によって牛耳られているからだ。そんな世界で報われない苦勞をするくらいなら、経済界に進み、誰も手を付けていない新しい分野を切り開けとの思いがあるのだろう。鶏口となるも牛後となるなかれ、である。

しかし、先生の独立自尊の考えに反するようだが、やはり世に出るためには踏み台が必要である。他より高い踏み台があれば、より高く跳ぶことが可能なのは道理である。

先生は、私に娘婿、養子縁組といふかなり高い踏み台を用意してくださったのだ。それは先生の本意ではなく、奥様のきん様の意向を汲<sup>く</sup>んでのことかもしれない。それでも構<sup>く</sup>わない。私は、その踏み台を使わせてもらうことにした。

福澤家の養子になることで、私は世に出る通行手形を得、親戚縁者たちは岩崎家の再興だと喜び、騒いでいた。

しかし母だけが違っている。

母は目に涙を溜めながら、「養子に行っても卑屈<sup>ひくつ</sup>になるんじゃない」と私に言った。

「大丈夫ですよ」

私は、微笑<sup>ほほえ</sup>んだ。幼い子供ではない。虐<sup>いじ</sup>められたり、卑屈<sup>ひくつ</sup>になって泣くようなことはない。何をそれほど心配しているのか。私の微笑は、過剰に心配する母を安心させるためのものだった。

「私は悔しい。何が福澤だ。西の果ての草深い田舎のサンピン侍の子ではないか。世が世なら、そんな者の世話にならずとも留学くらいさせてやったのに……」

私はドキリとして、表情が固まった。サンピン侍とは、扶持<sup>ふち</sup>が少ない下級武士のことだ。母がこんな下品な言葉を使うとは……。よほど悔しいのだろうと、母の心を思いやった。養子に行くとの決断は、間違<sup>くつじやく</sup>いだったのか。母の心に屈辱<sup>くつじやく</sup>を与えてしまったのか。

母は岩崎家が武田信玄たけだしんげんにつながる家柄であることに誇りを持っている。維新で成り上がった下級武士など、なにをするものぞと密かに思っていたのだ。

「お父様、お母様を幸せにするから」

私は、母の手を取って誓った。先生の養子になるということは、塾生たちや世間の人たちが何を言おうと、世に出るチャンスであることは間違いないのだ。

もう一人、私の福澤家への養子を快く思っていないだろう人物がいる。彼女の名前も母と同じサダであることが奇妙な偶然である。

貞、すなわち小奴こやつこである。

私は、自分のことを卑怯者ひきょうものであると認めざるを得ない。福澤家に養子に行くことを、貞に秘密にしていたのだ。

貞のことをファム・ファタール、運命の女であると思う気持ちは今も変わらない。しかし貞に会い続けることは、新妻になるふさを傷つけることになるだろう。それにもし貞のことが表沙汰になり、あることないことが喧伝けんでんされれば、先生はもとより奥様のきん様も不愉快になられ、養子の話、ひいては留学の話が無くなる可能性が十分に考えられる。

恋か出世か。極めて私らしくもない、現実的で俗っぽい悩みだった。人は、この二者択一でどちらを選ぶのだろうか。私は、出世を



選んだわけである。

ふさに、このことをきちんと伝えるべきだと思った。しかしそれをする勇氣はない。私は、自然に消え去っていくことを選んだ。この方が美しいだろう、貞とのことは良き思い出しにすればいいと勝手に思うようにした。

貞は花柳界かりゆうの女である。私が留学している間に、私のことなど通り過ぎるそよ風のように、さっと頬ほおを撫なでた程度にしか思わなくなるだろう。

私の予想は完全に裏切られた。そよ風ではなく台風だった。

私は横浜港で、先生、きん様、婚約者のふさ、そして塾生たちに囲まれて乗船時間を待っていた。

ふさは、すでに妻になったかのように愛おしげな目つきで私を見つめ、「お体にお気をつけくださいませ」と言った。私は、「うん」と優しく応えた。その姿を先生夫妻も笑顔で見守っていた。

その時だ。私を囲んでいた人々の間から、大きなうねりのような驚きの声が上がった。

何かと思い、私もふさも声のした方向に顔を向けた。私を囲んだ人々の輪が途切れ、空間ができた。そこに白馬に跨またがった貞が現れたのである。

私は、言葉を失った。先生もきん様も、勿論もちろんふさも驚きで目を

瞠り、口をぽかんと開いている。ふさは恐怖も感じているのか、私の背広の裾を強く握りしめている。

馬上の貞が、私を見つめて笑みを浮かべた。私は、強張りつつも笑みを返したが、頭の中でこの場をどのように切り抜けたらいいのかと考えを巡らせていた。

貞が、馬からひらりと降り、手綱を持ったまま私の方に近づいてきた。ふさは、私と貞を交互に見つめていたが、貞が近づくにつれ、恐れをなしたように私の後ろに隠れた。

周囲の人たちはしわぶき一つ発しないで、私と貞を見つめている。

白馬の手綱を引く貞は、まるで歌舞伎か何かの舞台から抜け出してきたように美しい。輝くような色白で、西洋人形のように目鼻立ちが整っている。全身真っ白の乗馬服に黒のブーツを履き、通常の乗馬帽ではなく鍔の広い帽子をかぶっている。

貞の登場に驚いていた人々も、息を呑むような美しさに見惚れていた。

私も同様に見惚れてしまっていた。愚かなことに、すっかりこの場の危機的状況を忘れてしまったのである。

「やあ、来たの？」

私は貞に声をかけた。ふさが私を見上げる目を瞬かせた。

「お知り合いなの？」

ふさが聞いた。

「ああ、ちよつとしたね」

私は穏やかに答えた。

こういったところが私の軽薄なところだ。軽薄であるがゆえに、こんな場面でもじたばたしない。いわゆる開き直りと言うやつだ。

貞のことで先生やきん様に愛想をつかされ、なかんずくふさに嫌悪される可能性がある。その挙句、アメリカに旅立たんとする今この場で、取りやめになるかもしれない。土壇場どたんばでそんなことになれば大いに恥をかくことになるのだが、私は、それはそれで運命であると覚悟を決めたのだ。

すると非常に穏やかな気持ちになり、周囲の状況が鮮明に見えてきた。

先生からは、私がどのような立ち居振る舞いをするのか見ている気配を感じたのである。

「その方がご婚約のお相手？」

貞は、私の背後に身を隠し、覗き込のぞむようにしているふさに視線を向けた。

「そうだよ。紹介しよう。福澤先生のご息女でふささんだ。留学が明けたら、結婚する」

私は、落ち着いた口調で言った。

「それはおめでとうございます」

貞は笑みを浮かべて、ふさに頭を下げた。

ふさは、少しおどおどした様子だが、私の背後から、前に出て、

「福澤ふさです」と言った。

「よしちよう 葭町の半玉はんぎよくの小奴です。ももすけ 桃介さんにはいろいろお助けいただいた

たものです。この度のご婚約とご留学の件は、新聞で知りましたの。どうしても旅立たれる前に桃介さんにお礼を申し上げたくて、参りました」貞はふさに向かって言い、それから私を見て「お氣をつけてアメリカに行ってきてくださいませ」と言った。

その目は落ち着いた光を宿しており、別れの哀しみはみじん微塵も感じられなかった。さすがは半玉とはいえ、花柳界で生きる女である。多くの人の前でしゆうたんば愁嘆場を演じることはない。

「新聞で知ったのですか」

なるほど、福澤諭吉の娘の婚約者の洋行となると、記事になるのだ。

それに花柳界は、上流階級に関する情報、ありとあらゆるゴシップがいち早く流れる場所である。貞は、私の婚約と留学の情報を、新聞などよりも早く入手していただろう。しかし私から何か言ってくるのを待っていたに違いない。

「ええ、桃介兄さんから一言もなかったものですからね」

「悪かったね。アメリカについたら手紙を出そうと思っていたんだ」

私は、悪びれずに言った。

「こちらはどなたかな？」

先生が、きん様と一緒に近づいてきた。表情は硬く、やや陰悪でさえある。

「先生、どうも紹介が遅れました。いつぞやお話したかもしれませんが、野犬に襲われ、危ないところを救った縁で知り合いました  
葭町の浜田屋の貞さんです」

私は、びくつくこともなく貞を紹介した。

「葭町？ 浜田屋？」

先生の目が丸く見開いた。花柳界には一切、縁のない先生が驚くのも無理はない。

「浜田屋の貞でございます。小奴の名前でお仕事をさせていただいております。お店では伊藤先生や大隈先生おおくまにご最前ひごにさせていただきます  
ております」

貞が言った。

ますます先生の目が大きく開く。私はその様子を見て、心が軽やかになった。この辺りも軽薄さのなせるところだ。

「伊藤博文首相に大隈重信伯爵？」

先生は、まるで助けを求めるように私に顔を向けた。

「はい、貞さんは人気者なのです」

「福澤先生もどうぞご鼻屑に」

貞は言った。

先生の隣に立つきん様が厳しい顔になった。

「いや……私は……。まあ、何はともあれ、桃介君の見送りありがとう」

先生は苦笑いを浮かべた。

乗船期限を告げる汽笛が港中に響いた。

「桃介君、出港の時間だ。船に乗りたまえ」

先生が言った。先生は、ふさのためにも早く貞の前から私を引き離したいのだ。先生の勘は鋭い。私と貞の間には、何かがあると感じ取ったに違いない。

「はい。しっかりと勉強してまいります」

私は、先生の手を固く握った。

周囲から、万歳の声が上がった。音頭を取ったのは、原田だった。

「桃介兄さん、お体に気をつけてください」

貞はそれだけ言うと、再び白馬に飛び乗り、人の間を駆け抜けて

行った。私を振り返りもしなかった。貞の目に寂しさを見いだせなかったのは残念な気もしたが、そこに貞の気丈さを見た気がした。

私は、貞の後ろ姿をわずかの時間、見つめていた。その時、ふさの嫉妬を帯びた暗い視線を感じたのである。慌ててふさに振り向き、その小さな手を取って「待っていてください」と強い口調で言った。ふさは、目に溢れんばかりの涙を溜め、小さく頷くばかりだった。

\*

海はどこまでも広がっている。私はボーイに声をかけ、二杯目のビールを頼んだ。少し眠くなり、目を閉じた。運命とは逆らわず、上手に身を委ねるものなのだ……。

2

私がアメリカに旅立った明治二十年は、どんな年だっただろうか。

その十年前の明治十年（一八七七）九月二十四日、西南戦争の首謀者となった元参議、西郷隆盛が戦争に敗れ、鹿兒島の城山で自刃

した。これで国内で頻発していた明治政府に不満を抱く士族たちの反乱が終わった。

維新革命の軍事的リーダーであった西郷は、時代に乗り切れない士族たちの不平、不満を一身に引き受けてこの世を去ったのだ。

その翌年、明治十一年（一八七八）五月十四日、明治政府最大の権力者であった内務卿大久保利通が紀尾井坂で不平武士に暗殺される。

西郷と大久保という明治維新の立役者が相次いで亡くなったことで、実権は伊藤博文や大隈重信に引き継がれた。

国内では、国会開設や憲法制定の論議が盛んになってきた。

国力が充実するにしたがって、社会制度も早期に欧米に追い付くため、伊藤らは国会開設や憲法制定に動き出した。しかし、伊藤と大隈の意見が対立し、大隈は明治十四年（一八八一）十月十一日に参議を罷免されるといふ事態が起きる。政変である。大隈は下野し、政府は伊藤中心で回ることになった。

その後、明治十八年（一八八五）十二月二十二日にそれまでの太政官制が廃止され、内閣制度が確立された。そして内閣総理大臣に伊藤博文が就任した。名実ともに伊藤が明治政府のトップとなったのである。伊藤は早期に憲法を制定すべく、精力的に動いた。

欧州ではビスマルクが宰相を務めるドイツが勢いを増していた。



一方、東アジアでは日本の台頭をこころよく思わない清国しんと朝鮮が  
ますます日本への敵対の色を濃くしていた。庶民たちの間でもいず  
れ日本と本格的にぶつかるだろうと噂うわさされていた。

私が向かっているアメリカはどうか？

一八六五年、奴隸解放どれいを巡って四年にわたって争った南北戦争が  
終わった。

その間、北軍、南軍合わせて約六十万人以上の死者が出たとい  
う。戊辰戦争の死者数が約八千二百人である。一人一人の命の重さ  
を考えると、軽々なことは言うべきではないが、南北戦争がいかに  
大きな犠牲ぎせいを払った戦いであったかということがわかる。その上、  
戦争を勝利に導いたリンカーン大統領が暗殺されるという悲劇も招  
いている。

あの戦争から約二十年が過ぎているが、まだ南北が和解し、分断  
が解消しているとは言えないのではないだろうか。

そして自由を得たとは言うものの、黒人に対する差別が根強く残  
っているという。日本人に対する差別はどうなのだろうか。

一八八二年には移民法が成立した。これは中国人排斥法はいせきと言われ  
ている。大挙してアメリカに移住してきた中国人はカリフォルニア  
州人口の約九%を占めるという。

アメリカ人から仕事を奪う中国人排斥を狙いとするこの法律が施

行された結果、中国人移民は劇的に減少したのである。

アメリカ人から見れば、日本人も中国人も同じに見えるだろう。

中国人同様に差別されるのではないだろうか。

先生の長男いちたろう一太郎がニューヨーク州ポーキプシーに、次男捨次郎すてじろうがマサチューセッツ州ボストンに留学している。先生は、アメリカでの生活については彼らに世話になるようにと言ってくれてはいるのだが……。

### 3

同年二月二十一日に、船はサンフランシスコに着いた。

これがアメリカか……。私は、下船する際に足が震えるほど感動した。港には、数えきれないほどの船が停泊し、その向こうには雲を衝くような高いビルが立ち並んでいる。港を行き交う人は皆、見上げるほど大きく、立派な体格である。

私は、教えられた通り大陸横断鉄道に乗り、ロッキー山脈を越え、シカゴ経由でニューヨークに着いた。そこで財閥・森村組のニューヨーク支店に立ち寄り、先生が送金してくださっていた一〇〇ドルを受け取った。そこから再び汽車に二時間ほど乗り、ハドソン川を越える。一太郎が待つポーキプシー駅に着いたのは三月三日の

夕方だった。

約五〇〇〇キロにも及ぶ長い汽車旅だった。アメリカ大陸の大きさを肌で実感した。荒涼とした景色が延々と続く。時折、遠くを土煙を上げてバッファローの群れが走り抜ける。雪を頂いたロッキー山脈は絶景だった。

汽車の食堂では、日本で食べたことがない分厚いステーキが供された。食事が合わなくて何も食べられなくなるのではと懸念していたが、全く杞憂きゆうだった。

この超長距離鉄道のお陰で、アメリカの産業が大きく発展したのだろう。

これだけの線路を敷設するのにどれだけの労働力を必要としたのだろうか。幾万、幾十万の労働者、それも主に中国人を使ったと聞いたが、中には不幸にも事故で命を落とした者もいることだろう。多くの中国人労働者を使役しながら、不要になると排斥する法律を作ってしまう白人社会の傲慢ごうまんさ、閉鎖性に、私は暗い気持ちになったが、延々と続く汽車の旅に圧倒されたのは事実である。

ニューヨークに着いた時は、もう驚きを超えて、声も出ない。船でサンフランシスコに着いた時の何倍も衝撃を受けた。

ただただ、アメリカは凄すこい。そのひと言でしか私の気持ちを言い表せなかった。

摩天楼まてんろうと呼ばれる高層ビルを見上げた。ビルに押し潰つぶされるような錯覚おちいに陥おちいった。

私は摩天楼を見上げ、アメリカで事業をしてみたい。ここで成功者になり、この摩天楼を支配してみたいと思った。きっと多くの若者が私と同じような願望を抱くだろう。それだけの魅力が、アメリカにはある。

駅の改札を抜けると、一太郎が待っていた。彼の顔を見ると、旅の疲れと興奮はあったが、全身の力が抜けるほど安堵あんどした。英語もままならぬ中で鉄道の旅の間、日本人にはただの一人も会わなかったからだ。

「桃介さん、アメリカへようこそ」

一太郎は笑顔で言った。

彼は、地元大学で農学を専攻している。やや人見知りのところがあると聞いていたが、温厚そうな印象を受けた。

「お出迎え、恐縮です」

「あなたがふさの婚約者ですね」

一太郎は、私の荷物を持つとうとした。

「義兄にいさん、大丈夫です。自分で持てます」

「お疲れではありませんか」

「疲れてはいますが、それ以上に興奮しております。アメリカは、

広い。そして凄い。見るものすべてが感動です。こんな国で勉強できるなんて私は幸せです」

私ははつらつとした口調で言った。

「お元気な様子で安心しました。桃介さんは明るい方とお見受けします。ふさは、大人しいところがありますから、ふさの夫にふさわ相応しい方だと思います」

私は、義兄一太郎に気に入られたようである。

「私の住まいも決めていただいているとか……」

「はい、今からご案内します」

一太郎は、待たせてあった車に私を案内した。

ポーキプシーの街にはニューヨークのような摩天楼はない。静かで落ち着いた雰囲気だ。緑の木々が多く、それらに囲まれるように赤や白の美しい煉瓦造りの家が続いている。

「いい街でしょう？」

「はい。とても静かですね」

「私は、ニューヨークのような喧騒けんそうはあまり好きではありません」

一太郎は言った。やや浮かない表情である。私は、興奮しっぱなしであるが、一太郎の方が疲れているように見える。

「着きましたよ」

車が停まった。車から降りると、門から玄関まで淡い緑の芝生の

庭が広がっていて、その先に赤みを帯びた煉瓦造りの二階建ての家がある。二階の上には小さな塔があり、窓は鮮やかな色のステンドグラスで飾られている。日本の家屋の質素さに比べれば、豪華だが、威圧感はない。私はたちまちこの家が好きになった。

車の停車する音を聞きつけたのか、玄関のドアが開き、かっかく恰幅の良い男性が現れた。

「ようこそ」

男性は流暢な日本語で私に呼びかけてきた。

「君の大家さんになるユンハンスさんだ」

一太郎が言った。

「福澤桃介です。よろしくお願いします」

「長旅に疲れたでしょう。中に入ってください」

ユンハンスは太い腕で私の荷物を軽々と持ち上げた。

「私が……」

私が持ちますと言う間もなく、ユンハンスは歩き始めた。私は慌ててその後続いた。

ユンハンスはドイツ人である。この家に日本人の夫人と十五歳の息子と住んでいた。

リビングに入る際、一太郎が耳打ちをしてきた。

「多少、うるさい人ですが、いい人ですから」

私がリビングのソファに座ると、夫人がテーブルに日本茶を用意してくれた。それを呑むと、ようやく体の芯から疲れが押し寄せてきた。

4

私のアメリカ生活が始まった。

ユンハンスは、日本の名古屋で病院の院長をしていたことがある。彼は、日本や日本人が大好きで、派手好みで金の亡者のようなアメリカ人があまり好きではなかった。

彼を見ていると、武士道が日本人の専売特許ではないことに気づいた。

彼の生活は、質素かつ厳格である。自分の子供に対しては非常に厳しく躰しつけをしていた。愛情は深いのだが、決して甘やかすことはない。子供が泣いても、寒風吹きすさむ中で冷水浴を強しいるのだ。私に対してはさほど厳しくなかったが、それでも厳格だった。夕食の時間に遅れると、ものすごく叱なぐられたこともある。

一太郎は、ユンハンスの厳格さに辟易へきえきしていた。先生に苦情の手紙を出しては叱なぐられていたようだ。別の下宿先を見つけないと私に泣き言をいうこともたびたびだった。

一太郎とは初対面だったが、アメリカの空気になじんでいるようには見えなかった。どこか鬱屈うっくつがあるようだ。

私が心配する話ではないが、その点に関してはユンハンスも同意見で、あまり食が進まないので心配していると話していた。

悩みがあるのだろうか。

私にも悩みがないと言えば嘘になる。ふさとの結婚のこともそうだが、横浜埠頭ふとうで別れた貞のこともある。

しかし、今、私の頭を支配しているのは、広大なアメリカという大陸だ。まさに心が躍おどるとはこのことを言うのだろうか。こんな凄<sup>おぞ</sup>い国で仕事をしてみたい。その意欲が全身にみなぎっている。こんな気持ちになったのは、私の人生で初めてのことだ。

私は、自分が何者になりたいのかよくわからなかった。川越の貧しい家の生まれにもかかわらず、東京の慶應義塾けいおうで学ぶという機会を得ることができた。これだけでも僥倖けいじやうといえるだろう。

日本中に貧しくとも学びたい、世に出たいと願う若者は多くいるはずだ。しかし、そのほとんどはどんな機会を得ることもなく埋もれてしまうだろう。

私は恵まれていた。ついにアメリカ留学の機会を得ることができた。これがゴールではない。ようやく恵まれた出自の塾生たちと同じスタートラインに立ったのだ。すべてはここから始まる……。



英語が通じない。当然である。日本で少しかじった程度の英語が通用するはずがない。一太郎に相談すると、すぐに個人レッスンを手配してくれた。

塾や人前では遊び人を装い、陰で必死に勉強したが、ここではそんな気遣いは必要ない。私は、必死で英語を勉強した。

大学に入るという考えはなかった。とにかく早く実践で実学を身に付けたかった。学者になりたいわけではない。桃介にしかねないものになる。それは独立自尊という先生の考えを体现する実業の道だろうと考えた。アメリカという国にやってきたことで何かが見えた気がしてきたのだ。

ユンハンスは私の勉強ぶりに感心し、君の努力を見ていると、アメリカの有名大学に入学するのは、問題ないと太鼓判たいこばんを押してくれるほどだった。

一カ月後には英語に自信が持てるようになった。私は、イーストマン・ビジネス・カレッジに入学した。

この学校は先生も推奨していて、幾人かの塾生が多く学んでいた。他の学校と比べて優れているのは実践的な教育を提供している点だった。学校の方針は、短期間でアメリカで通用するビジネスマンを育成するというもので、商業に関わる法律を学ぶだけでなく校内でのみ通用する模擬紙幣もぎしへいを使って実際の商売をするなど、ユニー

クな内容だった。

私は昼夜を問わず勉強し、通常六カ月程度かかるところを四カ月で修了した。

「桃介さんは、聞いていた評判とは違いますね」

一太郎が言った。

「どんな評判ですか？」

私は聞いた。

「少し偽悪家のところがあるのかな。必死で勉強している姿を見たことがないと聞いていますが、全くそんなことはありませんね。もの凄い勢いの勉強ぶりで、私は驚いています」

「私は、とにかく早く実業につきたいのです。アメリカの強大さに驚いたからです。先生が、私をアメリカに留学させた意味がわかった気がします。ここでは何も飾らず、何も気取らず勉強ができて、とても自由になった気がします」

「桃介さんはアメリカの気風に合っているんでしょうね。ところで早く実業につきたいのはなぜですか？」

「私は、なんの後ろ盾もない人間です。両親も貧しく、私が世に出るには何も助けになりません。私はそのことを悔くやんでいるわけではないんです。両親の代わりに先生が、私のような者に留学の機会を与えてくださいました。その恩に報いるためにも早く実学を身に

つけ、独立自尊の考えを実践したいんです。先生は、人はまず職を得る方法を講ぜよとおっしゃっています。しかる後に社会の各方面で働けと。今は、先生のお力を借りていますが、ゆくゆくは、その助けがなくても生きていけるようになりたいのです。それが先生の考えの実践だと思っています」

私は、一気に言った。

「大学には行かないのですか？」

一太郎が力のない声で聞いた。

「大学に行っている時間が惜しい。アメリカに来たことで自分がやりたいこと、なりたい姿が見え始めた気がするんです。この機を逃したくはありません」

「それならポストンにいる弟の捨次郎に相談したらどうですか。桃介さんは前向きな人だから、捨次郎と気が合うと思います」

「一太郎さんは、これからどうなさいますか？ 最近、お元気がないようなので心配しています」

「ご心配をかけてすみません、私ですか……。私は今、悩んでいるんです。実は、父や母から結婚を反対されています」

一太郎は、肩を落とした。

「結婚！」

私は、驚いた。一太郎の悩みが結婚だとは気が付かなかった。

「相手がアメリカ人なのです。それで反対をしています。父も母も私の行動に制約をかける人ではありません。しかしアメリカ女性  
が、今の日本で暮らせるかと心配しているんです。本音では私に日本人の妻をめとらせたいのでしょう。女性にうつつをぬかして学業に身が入らないなら帰国しろと言われました」

「相手の女性はどう思っておられるのですか」

私の問いかけに、一太郎は弱く笑みを浮かべた。

「それが……」一太郎は言い淀んだ。「じつは、よくわからないんです。私の一方的な恋かもしれません。私がこの国に残る決心でもすれば違うのでしょうか……」

「それはいけません。一太郎さんは日本に帰って、一家を成すことを先生は期待されています。アメリカに残るなんて許されないでしょう」

一太郎は、精神的にも非常に繊細せんさいなところがある。優しいと言えば、優しいのだが、このアメリカで道を切り開くのは、私の目から見ても難しいだろうと思う。

「父からもそのように言われています。いずれにしても少し疲れました。どうするかはよく考えてみます」一太郎は、私を見つめて言った。「捨次郎の住むボストンに行ってください。新しい道が開けるでしょう」

私は、すぐに行動した。捨次郎に連絡を取り、私の考えを伝えた。捨次郎は大賛成してくれ、すぐにボストンに来てと言ってくれた。

私は一太郎とユンハンスに別れを告げ、ボストンに向かった。

5

私は、アメリカ生活を謳歌おうかしていた。ボストンに行き、捨次郎に紹介されたダンマー・アカデミーでさらに英語に磨きをかけた。

ここでも英語と実学を学んだ。学長は、私が初の日本人学生であることや、日本の有力者である福澤先生の義理の息子であることから、非常に歓待してくれた。

日曜日には、必ずと言っていいほど自宅に呼んでくれた。学長夫人や令嬢と共にテーブルを囲み、歓談する機会は私に多くのことを学ばせてくれた。

捨次郎は、私があまりにもアメリカ人たちとの関係を深めるので心配している様子も見せた。

特に若く美しい学長の令嬢と連れ立って街を散策していると噂を聞きつけた時は、やや激高し「桃介君、君は、ふさの婚約者であることを忘れるんじゃないよ」と言った。

私は笑いながら、「義兄さん、ご心配なく」と答えた。

私が、あまりにも厚遇され、アメリカ人との関係が良好であるため嫉妬しているのだろう。

ふさとの婚約に支障をきたすようなことをするわけがない。その婚約があつたお陰で、先生の支援を得られ、アメリカで学ぶことができるのだから。それでというわけではないが、貞とは連絡を取っていない。彼女との関係は、これからどうなるか私には想像がつかない。成功して、めかけ妾の一人でも持つようになれば、それが貞になるのだろうか。しかし夫婦関係を第一に考えられる先生がそんなことを許してくださるわけがない。また貞も望まないだろう。「それならいいが、勉強に来ているのだからね。それを忘れないように」

捨次郎は、強く釘を刺した。

私は、笑つてもう一度「ご心配には及びません」と言った。

学長は、私に多くの有力者を紹介してくれた。その中で、ある投資家が株について教えてくれた。

非常に興味深い話だった。

アメリカとフランスの違いは株にあるというのだ。フランスは、過去に発展して、現在では進歩が止まっている。これに反してアメリカは進歩の途上だ。多くの人が競って新しい事業を起こしてい

る。それを可能にしているのが、株である。皆、株を使って多くの金を集め、事業を起こしているのだ。株の時価が高騰すれば、その人の資産は増える。株を売却するなり、株の含み益を担保に融資を受けるなりして資金を調達し、事業を発展させるのだ。従って株の騰貴と事業の発展は連動しているのだ。日本も新しい国であるなら株に注目し、株の売買を大きくすれば、事業が大いに発展するだろう。

私は、株については良く知らないが、私のように資産も後ろ盾もない者が事業を起こすには株に注目する必要があると思われる。

捨次郎は、ふさの婚約者でありながら、学長令嬢と遊んでいるという噂に警戒心半ばで私を見ていたが、私はこれも勉強なのだと考えていた。

世に出るためには人と良き関係を結ぶ必要がある。その人を利用しようというのではない。その人に可愛がられることで多くのチャンスを得ることができるのだ。

一太郎や捨次郎のように、福澤先生の子息という一段も二段も高いところに立っている者は、それを踏み台に世に出ることができ。それに比べて私は、ふさの婚約者になったといっても先生の本当の息子でない以上、自分での上がっていかねばならない。その時に一番重要になるのは人間関係なのだ。アメリカという未知の国

で、その国の人とどれだけ深い人間関係を築くことができるか。私は修練しているのである。

私はアメリカ人と交流するのに、不思議なほど壁を感じない。日本人は何故か日本人同士で集まることが多い。アメリカ人の前では卑屈になる傾向にあるようだ。しかし私は、いつも胸を張って「ハロー」と言う。

そのうちに、先生から指示が来た。モリスという親日家が重役をしている全米一のペンシルベニア鉄道に入社しろという。

アメリカに比べるべくもないが、日本でも鉄道事業が澎湃ほうはいとして立ち上がっている。塾の先輩であり、先生の腹心でもある中上川彦次郎じろうが山陽鉄道の社長に就任した。先生は、私をその部下にするために鉄道事業を学べというのだ。願ってもないチャンスだ。早く実業を学びたいという願いがかなえられたのだ。

私は、山陽鉄道の出向社員としてペンシルベニア鉄道に入社した。全米に約七〇〇〇キロもの路線網を持つ、最大の鉄道会社である。ここでも私は人間関係を重視し、社交性を発揮した。お陰で社長以下、幹部たちは私を非常に厚遇してくれたのである。

鉄道実務を実地で教えてくれるのは勿論のこと、フリーパスを支給され、全米のどこに行くのも無料にしてくれた。その旅は視察ということになっており、幹部社員の案内付きで列車も特別仕様車を



利用していいのだ。また経営に関する資料も自由に閲覧することができた。この厚遇を大いに活用し、鉄道事業をかなり深く学ぶことができたのである。

またこの間、アメリカにいる塾関係者などと交流を深めた。

岩崎弥太郎の長男で、帰国すれば三菱財閥を引き継ぐ久弥はその筆頭だった。

岩崎弥太郎を先生が高く評価したことから三菱と慶應義塾との関係が深まった。そのため久弥も一時期、塾で学んでいたのである。

彼は非常にまじめな人物で、日本一の資産家の一族なのに生活は質素そのものだった。この点は学ぶべきであると思った。資産家になっても、それで浮かれて散財すれば、たちまち没落するのである。

中でも馬場辰猪ばばたつひが最も印象に残る人物だった。

彼は、土佐藩士の息子で塾で学び、イギリスやアメリカに留学し、将来を大いに囑望しよくぼうされていた。

非常に優秀かつ眉目秀麗ひもくしゅうれいで演説も上手く、大衆を引き付ける力があった。

同じ土佐藩出身ということで岩崎弥太郎の長女との結婚話もあったほど、多くの人から評価されていたのである。

彼は実業界ではなく政治の方面に突き進んだ。板垣退助いたがきたいすけらと自由

党を結党し、藩閥政治打破を唱え自由民権運動に奔走した。ほんそう

しかし板垣と路線の違いから喧嘩別れし、板垣は自由党を解党してしまった。けんか

これが運命のわかれ道だったと言えなくもない。辰猪は、その後も一部の同志と藩閥政治打破を唱え続け、民権派として行動した。その行動は徐々に過激となっていき、彼は政府の監視下に置かれるようになってしまった。

明治十八年（一八八五）十一月二十一日、事件は起きた。

アメリカへの亡命を考え、準備していた辰猪は同志大石正巳と共に横浜に行き、モリソン商会に立ち寄った。おおいしまさみ

モリソン商会は、ダイナマイトなど爆発物専門商社だった。彼らは、そこで鉱山開発に使用するとの名目でダイナマイトの使用法や代金を質問したという。しかも偽名を使い、辰猪は松井、大石は高田と名乗った。

彼らが実際にダイナマイトを購入手続きしたのかどうかは知らない。

しかし当時、辰猪は亡命の準備をするほど日本の状況に絶望していたと思われる。自由民権運動に行き詰まり、藩閥政治打破も実現しそうになかった。

彼らはモリソン商会に立ち寄ったのは「冷やかし」であると公判

で主張したのだが、実際、その通りだろう。ダイナマイトを見ながら、硬直した藩閥政治が粉々に砕けることを夢見ていたのだろう。

しかし辰猪らを監視していた政府は、彼らがダイナマイトで政府要人に危害を加えようと計画したのだと考え、「爆発物取締罰則」に反した罪で、辰猪と大石は逮捕されてしまったのだ。

辰猪は、六カ月の長きにわたって拘留こいうりゆうされてしまった。結果は、証拠不十分で無罪となったのであるが、辰猪は先生たちの支援を得て、明治十九年（一八八六）六月十二日には横浜を発ち、アメリカに向かうのである。

辰猪は、日本に絶望し、アメリカで雄弁家として名を上げ、日本への捲土重来けんどちようらいを期もちしていたと思う。

しかし結核けっかくを患わずっていた。病は重く、本来は療養すべきだったのだが、それよりも雄弁家の道を選んだのである。

日本から甲冑かうちゆうや刀など武士の装束など一式持ってきており、それを身につけ、演説を行った。

私は、塾よしみの誼よしみで、彼の前座を務めた。日本の政治犯である彼と組んでアメリカで演説会などやれば、私も政府に睨にらまれるかもしれない。しかし構むいやしない。病をおして日本の政治状況むじゆんの矛盾を訴えようとする辰猪の壮挙を少しでも支援したいと思ったのだ。

フィラデルフィアのフランクリン・インステイテュートには数百

人の聴衆が集まった。

彼は非常に感動して「アメリカに来て以来、人が集まらなくて絶望していたが、最高だよ。こんなに来てくれるなんて」と言った。今まで悪かった顔色まで良くなったようだ。

「ここにはインテリが多いんですよ」

私も嬉しくなった。

私は、聴衆に向かって彼を日本の大政治家であると紹介し、ただいまより日本武士道について講釈を行うと前口上を述べた。

「それでは、どうぞ！」

大きな動作で彼を舞台に呼び込んだ。

彼は、甲冑を身につけ、腰に刀、背に弓矢を背負い、堂々と舞台中央に歩いてきた。

彼は、英語で最初は静かに、そして徐々に朗々とした口調で日本武士道について語った。それが終わると、日本の藩閥政治批判を始めたのである。

聴衆は、大きな拍手で彼の演説を讃えた。

しかし病には勝てず、明治二十一年（一八八八）十一月一日、三十九歳でこの世を去った。

残念ながら私は出張中で、彼の死に立ち会うことができなかつた。

葬儀万端は、岩崎久弥が執り行つた。彼の墓は、ペンシルベニア大学近くのウッドランド共同墓地にある。

辰猪の人生は、金銭や世俗的な出世という面では不遇だった。しかし自分の主義主張を貫き通して、誰にも媚びることなく生き抜いたという点では、先生の独立自尊を体現した人生だったと言えるのではないか。ただ時宜<sup>じぎ</sup>を得なかつたのは残念である。

\*

明治二十二年（一八八九）十一月、私は急遽<sup>きゅうきょ</sup>帰国することになった。北海道炭礦鉄道が創設されることになり、先生からその会社で働くようにとの指示があつたからだ。もう少しアメリカで暮らしたいと思つたが、先生の言われることに逆らうわけにはいかない。まだまだ私は自分の足だけで立つことができないのだから。

〈つづく〉